SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

靴ひものロンド

2020年／イタリア映画
配給：樂舎／100分

2022（令和4）年9月17日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２２－１０７

監督・脚本・編集：ダニエーレ・ルケッティ
脚本：ドメニコ・スタルノーネ／フランチェスコ・ピッコロ
原作：ドメニコ・スタルノーネ『靴ひも』
出演：アルバ・ロルヴァケル／ルイジ・ロ・カーショ／ラウラ・モランテ／シルヴィオ・オルランド／ジョヴァンナ・メッツォジョルノ／アドリアーノ・ジャンニーニ／リンダ・カリーディ

みどころ

夫による浮気の告白。何度もそれを聞かされた豊臣秀吉の妻ねねならそれなりの対応が可能だが、さて本作では？本作に見る別居と養育をめぐる争いは想定内だが、妻の自殺未遂にはびっくり！そこまでやるか！

若き日と老齢期の主人公を登場させる映画は多いが、本作は大人になった２人の子供たちも登場させて“家族のロンド”を描くから面白い。山田洋次監督流のそれとの対比もぜひ。

さらに、原題を『Lacci』、英題を『The Ties』とする本作の邦題は近時の大ヒット。この粋でおしゃれな邦題の中身をしっかり噛み締めたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

▪□■ダニエーレ・ルケッティ監督とは？３人の共同脚本は？■□▪

本作ではまず、監督、脚本、編集したイタリアのダニエーレ・ルケッティに注目。私は彼の作品を『ローマ法王になる日まで』（１７年）（『シネマ４０』未掲載）しか観ていなかったが、本作を観て再注目！プロダクションノートによると、彼はドメニコ・スタルノーネの原作『靴ひも』を読む中で、「愛に支配された人生を私たちは受け入れ生きていくことはできるか」という命題を見つけたそうだ。そして「わたしが最も関心があるのは人間同士のつながりです。このテーマこそが、作品を作りたいと感じるインスピレーションの源であり、最も情熱を注ぐ要素なのだと思います。社会や政治的文脈を背負ったもの、もしくは私的で限られた文脈に関わらず、人間関係を描くことで、単に“私たち”というだけではなく、“現代に生きる私たち”を語ることができるはずです」と語る彼は、本作の脚本を原作者のドメニコ・スタルノーネ、そして盟友である脚本家フランチェスコ・ピッコロとの３人で書き上げたそうだ。

家族をテーマにした映画は多い。日本では山田洋次監督がその筆頭だが、いきなり夫の

浮気の告白から始まる本作が描く家族とは？

■□■なぜ夫は浮気の告白を？舞台は？時代は？■□■

令和の時代になった今、昭和の歌手、坂本九を知らない人も多いだろうが、本作冒頭、彼が１９６６年に歌って大ヒットした「レットキス（ジェンカ）」の曲に乗って、夫のアルド（ルイジ・ロ・カーショ）と、妻のヴァンダ（アルバ・ロルバケル）が大勢の仲間たちと楽しそうにフィンランドのフォークソングである『ジェンカ』を踊るシークエンスが登場する。AKB４８、乃木坂４８、欅坂４８などのアイドルたちが歌い、踊る令和の曲は複雑だが、昭和の良き時代に大ヒットした『ジェンカ』の踊りは極めて簡単だ。その舞台はイタリアのナポリ、時代は１９８０年初頭だ。

帰宅し、長女アンナと、長男サンドロが眠った後、何を思ったのかアルドは突然ヴァンダに対して「僕はある女性と関係を持った・・・」と浮気の告白を。夫の浮気をテーマにした映画や小説も多いが、その大半は、コトがバレたのち、やむなく告白するもの。妻から何の質問もされないのに、あえて自分から浮気の告白をするケース（バカ？）は少ないはずだ。逆に追及されても、のらりくらり逃げ回ることが多いのは、現在大問題になっている、旧統一協会と自民党の国会議員との“関係”を見ればよくわかるはずだ。それなのに、アルドはなぜ今そんな告白を？

■□■妻の言い分は？夫の対応は？論点を整理すると・・・■□■

それはともかく、そこで注目すべきは妻の態度。夫の浮気に散々苦しめられてきた妻の代表は、豊臣秀吉の妻ねね。秀吉の女遍歴はすごいから、彼女くらいの経験を重ねれば、その対応も“大人のもの”になるが、本作に見るヴァンダが夫からの突然の浮気の告白に納得できず、悩み、苦しんだのは仕方がない。

夫のアルドはラジオ朗読のホストの仕事をしているから知的レベルは高い。そのため、あくまで冷静かつ論理的にコトの説明をしようとするが、ヴァンダの方はどう見ても感情的。その場ですぐに「出ていけ」と言われたアルドは、言われる通り家族のもとを去ったが、その数日後ヴァンダは彼を追いかけて職場まで押しかけて行ったからヤバい。その後ヴァンダの主張は、「私だって別の人生を生きたかった。でも結婚したら一生添い遂げると約束したから」「これは愛情だけじゃなくて、誠意の問題なの」だが、それってホントにそうなの？他方、激しい言葉で思いの丈をぶつけるヴァンダに対するアルドの対応はあくまで冷静だが、それもホントにそれでいいの？

面白いのは、その時点でヴァンダは夫の浮気相手の名前も顔も知らないにもかかわらず、それを探り当てる女の勘のすごさ。夫の職場からの帰り道、ある美しい女性とすれ違ったヴァンダは、「この女こそが夫の浮気相手だ」と直感することに。その直感通り、アルドの浮気相手は職場の同僚リディア（リンダ・カリーディ）だったが、その後アルドはリディアの元に移り住んでしまったから、ヴァンダによる職場への押し掛け騒動は、かえって事を荒だてただけかも・・・。

■□■想定内の展開が一転！自殺までするか！■□■

夫の浮気の発覚、告白から別居、離婚、子供の親権者と慰謝料額の決定。これは弁護士の私には想定内の展開だ。そして、スクリーン上はその想定通り進んでいく。面白いのは、その方向性をリードするのはヴァンダで、アルドは基本的にヴァンダの要求に従うだけだということ。さらに面白いのは、アルドはいかにも身勝手な男だが、愛人のリディアを愛するのと同じように、２人の子供たちをしっかりと愛していることだ。

私の目には、離婚に向けての本作の進展（？）はヴァンダの思い通りに進んでいると思われたが、そんな中、ある日、ヴァンダは窓から飛び降り自殺を図ったからびっくり！こりゃ一体ナゼ？もっとも、これで一巻の終わりとならず、自殺未遂で終わるところが本作のミソだ。これはひょっとして狂言自殺？それとも・・・？

私は本作中盤に見るヴァンダの自殺騒動に納得できないままスクリーンを見ていたが、幸いヴァンダは命を取り留め、それを契機に、女手一つで子供を育てることに。弁護士の目から見れば、『靴ひものロンド』と題された本作のストーリーは、これからが本番だ。

■□■あれから数十年！四人家族のロンドは？■□■

NHK の大河ドラマは、一人の俳優が若き日の主人公と年老いた主人公を一人で演じるケースが多い。しかし、映画では、若き時代と年老いた時代の主人公を別の俳優が演じるケースも多い。どちらも一長一短だが、いずれの場合も連続性に違和感がないことが大切になる。

しかして本作は、何と冒頭の浮気騒動で丁々発止のやり取りを見せるアルドとヴァンダが、ラスト近くでは年老いたアルド（シルヴィオ・オルランド）と年老いたヴァンダ（ラウラ・モランテ）として登場するので、はっきり言ってその連続性にかなりの違和感がある。他方、導入部で登場する２人の子供も、ラスト近くではいい年のおじさんサンドロ（アドリアーノ・ジャンニーニ）と、おばさんアンナ（ジョヴァンナ・メッツォジョルノ）として登場するので、これがあの２人の子供の成長した姿？とかなりの違和感がある。本作をそんなキャスト構成にしたのは、ダニエーレ・ルケッティ監督がアルドとヴァンダ夫婦だけでなく、サンドロとアンナという２人の子供を含めた４人家族のあり方を、数十年のオーダーで描きたかったためだ。

本作の原題は『Lacci』、英題は『The Ties』だが、邦題は『靴ひものロンド』と、近時の邦題にしては粋でしゃれている。ロンド形式とは、音楽で有名な、異なる旋律を挟みながら、同じ旋律（ロンド主題）を何度も繰り返す形式だが、人生もそれと同じようなロンド・・・？他方、靴ひもは誰でも知っている靴ひものことだが、その結び方は人によってさまざま。しかして、アルドの靴ひもの結び方は？

本作中盤、大人になった２人の子供たちと久しぶりに再会したアルドは、「弟が一風変わった靴ひもの結び方をする」と主張するアンナから「結んでみせて」と言われるままに靴ひもの結び方を見せてやったが、その中で生まれてきたものとは？それはどうやら、単なる靴ひもの結び方だけではなく、心の結び方だったらしい。本作中盤では、あれから数十

年後の４人家族が織りなすロンドをしっかり確認したい。

■□■ラストに注目！キューブの中には何が？猫はどこへ？■□■

本作ラストは、冷え切った関係のままで、老齢期を迎えた２人が、夏のバカンスを過ごす風景が描かれる。それ自体は面白くも何ともないが、面白いのは、２人が留守の間に家に入り込んだアンナとサンドロが家の中で起こす大騒動だ。

日本でもかつてルービックキューブが大流行したが、本作前半にはかなり大型のルービックキューブ（？）が登場する。これはよほどの手品を使わないと開けられないようだが、そのルービックキューブの中には一体何が入っているの？両親の留守宅に入り込んだアンナとサンドロは、アルドが大切な秘密として持っていたそのルービックキューブのありかを探そうとしたが、そこで２人が取ったあっと驚く行動とは？それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、バカンスから戻った２人は、玄関の鍵が開かないことに往生したばかりか、中に入ってみるとまるで空き巣に荒らされたように部屋の中はめちゃくちゃ。その上、ヴァンダの飼い猫ラベスまで失踪していたから、さあ大変だ。これは警察に届けるべきが当然だが、そこから見えてくる４人家族の本当の姿とは？

山田洋次監督が描く家族は常に、貧しくても明るく前向きだから、吉永小百合の主演がピッタリ。しかし、本作でダニエーレ・ルケッティ監督が描く４人家族とは？浮気の告白から始まった夫婦関係の崩壊は否応なく２人の子供たちを巻き込んだが、ある日、靴紐の結び方を通じて、少なくともアルドと２人の子供たちの間には、新たな心の結び方が生まれたらしい。その後、家族は再び４人で暮らし始めたが、もちろんそれは元の幸せな姿ではなかった。しかして、本作ラストに見る４人家族の実態とは？山田洋次監督のそれとは明確に異なる、本作に見るダニエーレ・ルケッティ監督の視座に注目！

２０２２（令和４）年９月２３日記